少女現葬

鏡花風月

1. This Is Love

時計を持ち歩かないこと。
あまり重くない時間潰しの道具を持つこと。
待ち合わせて出掛ける時の約束事がその二つ。
今日も相棒は待ち合わせに遅れていた。

2. Letters

「手紙って、また古風ね」
「だからいいんじゃない。手書きの文字よ。
私たちの為に宛てられた物みたいじゃない」
「宛先は違うけどね」
「宛名がないんだから、読み手が宛先」

3. Stay Gold

相棒は七つ道具を七つ以上携えている。
今日は可愛いペーパーナイフを取り出した。
何をどれだけ持ってるか今度聞いてみよう。
綺麗に開封された封筒からは三枚の写真と、
Dear が空白になった手紙が出てきた。

4. Beautiful World

「それで、どこで手に入れたんだっけ」
「なんで私が尋問されるの？」
「尋問じゃなくて、詰問よ」
悪戯にしてはちょっと出来過ぎている。

5. Simple and Clean

「行って視れば解るじゃない？」
「そうだけど、そうだけじゃない部分がね」
仕組まれてるとしても、行くしかない、か。
怪しげな手紙に誘われて結界の境を目指す。
秘封倶楽部、私たちの活動が始まる。

1. Be My Last

リボンには女の度胸と愛嬌が試されている。
髪が女の命なら髪を彩るリボンは拘るべき。
それが私の自論で、その日も大いに悩んだ。
結果として相棒にはこっぴどく咎められた。

2. COLORS

手帳に挟んでおいた手紙は色褪せていた。
にもかかわらずまるで汚れてはいない。
まるで封筒の時間だけを早送りしたみたい。
流石に中身は白くて綺麗な手紙が現れた。
宛名のない、私たちに送られた手紙が。

3. 嘘みたいな I Love You

相棒はまだ疑ってるかもしれない。
手紙は私たちが使っている部屋に現れた。
見つけたのではなく、現れた。
時刻を確かめに外を視たほんの一瞬の合間、
ぱさりと音を立てて机に置かれていた。

4. Passion

出自から何から疑問符はつきない。
けれど私たちを動かすには充分過ぎる謎。
同封の写真を視た相棒は大きな溜息を吐く。
どの写真にも結界の境が視えるわ、と。

5. Can you keep a sercret

今、手帳の中には手紙と四枚の写真が在る。
本当は昨日のうちに一人で開けていた。
夜の闇に得体の知れないなにかが潜む写真。
この場所には近付かないようにしよう。
開けてはいけない箱はきっとある。

現少
葬女
Be My Last
鏡花風月

現少葬女

Be My Last

「現在時刻、待ち合わせ時間より、はぁっ、四分二十秒遅刻、か。はっ、はっ」
ついつい癖で空を見上げてしまう。
まだ昼日中なので時刻を視るための星は出ていない。
携帯端末の画面が示す時間はとっくに集合時間を通り過ぎていた。
でもこのまま走り続ければ三十秒もせずに待ち合わせの手前の角を曲がり切る。
そこさえ過ぎれば相棒の姿も見えるし、向こうも視認することができる。
走るのを止めて息を整える。
遅刻した手前強く言えないけど、相棒にみっともない姿はあまり見せたくない。
息を大きく吸って、吐いて、ようやく足を踏み出す。
残り数十秒で辿り着く。
「……今日は、どうしようかしら」
口からつい出てしまったけど、今日の言い訳はどうしたものだろう。
ふと、また空を見上げる。
数時間後にはなによりも正確な時を刻む時計に変わる空。
ありがたいことに雲はまばらで天気が崩れる気配はない。
野外の活動も多いから基本的には晴れそうな日を活動日に合わせるけど、突発的な日程にはそうもいかない。スケジュールだって、早々融通が効くものではない。

だからこそ、二人のスケジュールが合った活動日に遅刻するのは大罪なのだ、とこの間こっぴどく叱られたばかりだし、今でもその言葉は覚えてる。
「怒るかしら。怒るわよね。怒るわ。私なら怒るもの」
自分がして欲しくないことをするのはよくないことだ、誰の言葉だったか。
「ああ、そうだ」
なんてことはない。
それを言ったのは他でもない、私の待ち合わせ相手。
秘封倶楽部のパートナー。
「メリー！　待たせたわね！　さぁ、秘封倶楽部のかつ……ど、うよ？」
角を曲がった先、いつもの待ち合わせ場所。
パートナーのメリーことマエリベリー・ハーン。
笑顔としかめっ面の両方が似合う彼女が。
そこに、いなかった。

§

私、宇佐見蓮子は上を見続けている。

何かの選手として高みを目指しているとか、そういうわけではない。
ただ純粋に、星の出ていない空を見続けていた。
「携帯に反応なし。掛けても繋がらない。多分、電池切れたままになってるわね」
秘封倶楽部の活動には携帯端末があまり必要ない。
どれだけ遅刻があろうと待ち合わせをすっぽかすことはない。
サークル以外の待ち合わせの時にドタキャンの連絡が来ることはあっても、活動の待ち合わせをした日には一度もない。
待ち合わせ場所にやってきて――さぁ、行きましょう――と手を取り合う。
秘封倶楽部は私とメリーの二人だけ。
その便宜性が実践派オカルトサークルらしさとも言える。
「五分、経ったわね」
上を見続けたところでメリーが来るわけじゃない。
かと言って何もしないのも退屈で、端末の時刻を確認しては空を見上げる。
人の気も知らずに雲はのんびり流れている。
これが夜空ならまだ過ぎゆく時間に焦りを加速させられるというのに。
私こと宇佐見蓮子はそういう能力を持っている。
星を視て時間を、月を視て現在位置を知る能力。

「もう……、どこで何してるのよ」
もしかしたらどこかで寝ているかもしれない。
つい立ち寄ってしまった公園のベンチとかで。
あの子の寝付きの良さと言ったらそれは素敵なもので、さらには寝相の悪さまで言えばそれはそれは素敵で蹴飛ばし返したくなるものだ。
「探しに行くと大抵すれ違うのよね、こういう場合って」
きっと散々走って探しまわったところでメリーが居て言うのだ。
『また遅刻よ、蓮子』
それはそれでいつも通りになっていいかもしれないけど、それこそ許せないものがある。つい頭をはたいてしまう程度には許せないだろう。
背中を預けているこの白いコンクリートの壁に――メリーメリー今あなたの元へ走っているわ――なんて伝言を書いて探しに行きたいけれど。
「あいにくそんな目立つペンなんて持ち合わせがないのよね」
あるのは黒いカバー手帳とそれに付随した万年筆だけ。
実践派オカルトサークルはフットワークの軽さが自慢。
「それもパートナーがいてこそ輝く、か」
怪異に巻き込まれた最中なら、そのフットワークを魅せつけるチャンスだけど。

「まだ何も始まってないわよメリー」
仕方なしに、また空を見上げる。
携帯端末が示す時刻が狂っていて、夜だったら視える本当の時刻では、まだ待ち合わせの時間になってないことを願って。

§

「現在時刻。待ち合わせ時間より二十分二十六秒」
はたしてそこにメリーはいた。
待ち合わせ場所の白いコンクリートに背を預ける私の目の前。
私と同じように、曲がり角を曲がってきた。
「あら蓮子、珍しいわね」
「まあメリー。そういうこともあるわよ」
遅刻した以外、いつも通りのメリーだった。
「それで、一体どうしたのよ」
遅刻した理由ぐらいはあるだろう。
「どうしたって、どうしたの？」

「どうかしたでしょう。どうしたのよ」
「どうかしたって、どうしたのよ」
「なんだか頭が痛いわ、この会話」
困ったほどにいつも通りのメリーだ。
「どうかしたんじゃなくて、頭が痛くなったのかしら」
うつむく私をまるで心配するみたいに覗くメリー。
心配するのは私の仕事なのに。
ふらふらとどこかに行ってしまうメリーを繋ぎとめるのは私なんだから。
「どうしたのよ。本当に変よ、蓮子」
変とまで言われてしまった。
メリーがいつも通りで、いつも通りのメリーが変というのなら、確かに私の方が変なのかもしれない。
「いや、それは認めないわ。メリー。メリーさんちのメリーさん」
「なにかしら、蓮子さんちの蓮子さん」
「私は宇佐見さんちの蓮子ちゃんよ。それよりあなた、今何時よ」
「あら、それを私に聞くの蓮子」
「そうよ。あなたに聞くの」

今の時間を知れば流石にどれだけ私を待たせたか解るだろう。
ごそごそとポケットやら帽子の中やらを探るメリーは、首を傾げて私を見る。
「あらやだ、携帯……、時計もないわね。蓮子、ちょっと失礼」
ぐいっと、馬鹿みたいな力で――あ、やばい。メリーなんかいい匂いがする――
首を固定されて――どうしよう身動きが取れない――メリー近い近い近い！
「うーん、視えないわね。蓮子、一体どうなってるの。あなたの眼」
人の眼球を覗くとか、そんなことより近いのよ息が当たるのよメリー！
「あなたの頭こそどうなってるのよ！」
あんまり動くと事故でも起きそうで、一応叫んだつもりだけど自分でも気迫とかそんな類のものはまるで感じられない。
私の眼を視たって時間なんかわかるわけないでしょどいてよメリー。
背中にはコンクリート。退くことはできず、メリーをどかすこともできない。
大体メリー重いのよ。肉感とか。肉とか、贅肉とか。
「メリー、私の眼は液晶デジタル時計じゃないわ」
だから人の顔を色気もなにもない掴み方しないで。そういうのはバスケットボールとか西瓜とか、そういう、ねぇ、痛いから鷲掴みしないで。
あと、近いってば。

眼も近いけど、頬も近くて、それに口も近いの。
「困ったわ。それじゃあどこにも時計がないわね。蓮子。今何時？」
「困ったわ。私の眼にはメリーしか映ってないから何時なのかまるで解らないの。だからそろそろ離してちょうだい」
自分でも視えないって言いきったのに、未だに納得いかないのか『んー……』と不満そうな声を上げるマエリ……なんとかハーンさん。ちょっとほんとに怖いから離して、と想いが通じたのか、がっちり掴んでいた指をそっと離してくれた。
指の痕とかついてそうな気がする。
きっとそんな余計なことを考えてたから隙があったんだろう。
頬を撫でようとした右手も、壁と仲良くしてた左手も両方メリーに掴まれた。
「えいっ」
なんて可愛らしい掛け声。
小さな掛け声は耳に届くよりも私の唇にぶつかった。
訂正、ぶつかったのは声じゃなく、声の元のメリーの唇。
キス、されてた。
「む、むむー」
メリー、という名前は声にならずに彼女の口の中で響いた。

コンクリートはメリーの仲間に成り下がった。ずっと一緒にいたのに薄情な奴。
しかし私一人でどうにかしようにも、文句を言う口は塞がれてる。
両手だって手首から抑えつけられてるし、八方塞りの逃亡不可能な状態。
逃げれないなら押し通る。
唯一抑える力の優しい顔から正面突破。
メリーを押し下げて作った隙間から逃げればいい。
と、いうのを見計らったように下がるメリー。
もっとキスが欲しいとせがむみたいに追いかける私。
違うの、違うのよメリー。
「情熱的ね、蓮子」
「なむ、なにをして、メリーがしたんでしょ！」
「え？　私が舌を入れたんでしょ？」
「そうよ！　って、そうじゃないわよ！」
いや、舌は……入れられそうだったけど。
「そもそも何の話をしてたのかしら」
「遅刻よ遅刻！　今は待ち合わせ時間から……、えっと、もう三十分は経ってる。
メリーは二十分も遅刻したのよ」

携帯端末しか時間を告げるものはないけど、なんなら時報にかけて確認したって構わない。というか他人の声を聴いて冷静になりたい。
「あらそうだったの」
「そうよ。いや、だからそうじゃないでしょ」
どうしてそんなに呑気なのよ。
って言っても遅刻常習犯の私だっていつも呑気に構えてたかもしれないけど。
「ええ?!　蓮子遅刻しなかったの?!」
「どうしてそこで驚くのよ。私も遅刻したけどあなたはもっと遅刻したでしょ！」
しまった。
自分が遅刻したことは言わなくてもよかったのに。
地雷を踏んだことを確信した私にとどめとばかりにメリーは微笑んだ。
「じゃあ、おあいこ。ね？」
む。ぐ。
でも、そうかもしれない。
普段こうして待たせているのは私の方なのだ。
ここで巻き返すには遅刻以外の何かを以ってしなければいけない。
「おあいこじゃないわ。く、唇を奪われた私が不利よ」

不利じゃ駄目じゃない蓮子。
不公平、不公平って言いたかったのよ！
「じゃあ追い掛けられたからおあいこね」
「OK、わかった。降参よメリー」
「勝利とは虚しいものなのであった。まる」
締めくくりの台詞まで吐いてご満悦なのか両手を離してくれた。
「で、どうして遅れたの？」
咲いたような笑顔が急に堅くなる。
無意識にじっと合わせていた視線は外れ、メリーは迷子みたいにあっちこっちに視点を彷徨わせている。忘れてしまった何かを思い出そうとする癖。
「おかしいわね。いつも通りに家を出たわ」
「そうね。待ち合わせはいつも通りだもの」
普段は五分前には着いているのだから、よほど何かなければ遅れたりはしない。
「いつも通りの道を通って……、いつも通りに蓮子は遅れたわ」
「いつも通りの私は関係ないわね」
私が間に合ったってメリーの遅刻には関係しないし、むしろ間に合ったらメリーがドタキャンしそうな気さえする。

「そうよね。いつも通りの公園を通って、そこのベンチに座ってたわ」
「ちょっと待って、どうして座るの？　いつも座ってたの？」
「蓮子、言葉がおかしいわよ」
「おかしいのはいつもメリーよ」
主に頭が。
「また塞いでしまおうかしら、蓮子のおかしな口」
「ごめんなさい。おかしくないです。それで、本当にどうしたの？　体調が悪いんなら予定を変えるわよ」
眩暈で座りこんだのだとしたら無茶はできない。
「大丈夫。なんだか眠かったのよ。それで、起きたら公園のベンチだったの」
「寝てたのね。期待を裏切らないとは。流石だわ、メリー」
「あらあら、うふふ」
首を傾げながらも照れ笑いを浮かべるメリー。
「褒めてない。褒めてないのよメリー」
「ひどい蓮子。騙したわね」
「そうよ。騙されたメリーには何か面白い話をしてもらおうかしら」
「じゃあ、とっておき」

ごそごそと胸元に手を潜らせて――どこに手を突っ込んでるのよ、この子は――
一枚の古びた写真を取り出した。
「どこに手を突っ込んでるのよあなたは」
「突っ込みどころは胸じゃないわ」
「その写真は何かしらメリー」
一ナノもボケの相手はせずに写真に眼を向ける。
保存が悪いのか色褪せ始めている。
「つれないわね。まぁいいわ。この間の写真、覚えているかしら？」
「覚えているし、今も持っているわ」
愛用の手帳に挟んだ写真を取り出す。
照らし合わせると、メリーのも私のも暗い森が映し出されている。
偶然か写真に写る木々は同じ種類のようで、少なくとも気候は同じ地域だろう。
「これは同じ場所の写真よ」
偶然ではなく、必然だった。
「メリー、それは確実？」
自然と声が低くなる。
この二つの写真には重要な情報が秘されている。

「ええ、そしてそっちの写真には未だに結界の裂け目が視える」
メリーが私の眼を変だと言うように、私もメリーの眼を変だと言っている。
結界を視る能力。
夢の中では視るだけでなく結界を越え、今の時代では在り得ない物をこちら側に持ってきてすらいる。天然物の筍やこの旧時代の写真のように。
「流石私のメリーだわ。ベンチに座って寝ているだけはあるわね」
「それは褒め言葉と受け取っていいのかしら……」
「勿論よ！　だってこれで今日の秘封倶楽部の活動先が決まったんだもの！」
二枚目の写真。
同じ場所から違う角度で撮ったという写真には夜空が映し出されていた。
ただの空じゃない。星々が輝く夜空。
星が輝く場所に私が行けない理由がない。
「いくわよメリー」
「秘封倶楽部の活動ね」
差し出した手を繋ぎ合わせる。
私が星を視て、メリーが結界を視る。
ふたりでひとつ、秘封倶楽部が歩き出した。

Be My Last

Ribbon probatur mulierem venustate atque virtutem.
Ornare crinem fascia si femina habeat vitam.
In mea Theoria die et sollicitum.
Erat sane vituperet, "socium" inde laborem.
Litteras trans comentarius Ive 'perierat.
Im 'non amo luteo invidiam.
Sicut ego quasi operculo in tempore ieiunii ante.
Inside est pulcra littera apparuit vere album.
Litterae sine voce est.
"socium" fuerint adhuc suspecti.
Quod pro epistula videri utimur.
Potius quam reperta videbatur.
Ecce iam medium modo facito extra tempus
Ego positum fuit in cum strepitu et Ri Pasa desk.
Signum ab origine quaestio non defuere.
Mysterium quoque sed ad movere nobis.
Buddy vidit photo magnum concluderent corde.
Impedimentum finis, licet oculis ipsum.
Nunc, quattuor photos et literis sunt in pocketbook.
Apertum est heri uni ex realiter.
Pictures nescio quid latens in tenebris ego noctis in latent.
Ut hinc probabit.
Scio quod non sit apertum consequat.

霧が覆う湖の上を飛ぶ。
箒を握る手にじんわりと冷たい水滴が溜まる。
「少し、寒いな」
太陽の高さ以外にこの湖には季節感が存在しない。
雪が降る冬ならまだしも、春を告げる桜も咲かないし夏を彩る向日葵だって見ることができない。秋に紅葉が漂うこともなく、そういう目印がないからかこの湖ではたまに距離感がおかしくなる。
今日はどんより分厚い雲が覆っているせいで霧の合間を陽光が射すことすらない。こういう早く湖を抜けたいと願う日に限っていつまでも湖岸が見えない。
その不安で自分の距離感を見失ってしまう。
不安は自分を失う迷路の入り口だからだ。
「あ、あんた」
不安感の代わりに湖と同じように季節感がない妖精が現れた。寒くても暑くても同じ格好の氷精は、私の顔を見て『しまった』と戸惑っているようだった。
「どうした。ひとりか？」
「うん。あんたは、また、あそこ行くの？」

どこかぎこちない顔を隠せずに氷精はしっかりと返事をした。
いつも通りだ。
子供というのはいつだってぎこちない顔を隠せずに、だからこそ素直でいられる。
「そうだぜ。なんならお前も来るか？」
それを知りながら誤魔化すのは、大人の仕事だ。
「……ううん、あたいは遊んでる」
処世術なんて、持ってても楽には生きられないのに。
案の定断られてしまった。
「そっか。そうだな。じゃあな」
これ以上構っても向こうが困るだけだろう。
適当に切り上げ、氷精の脇をすり抜けて飛ぶ。
「……ねぇ」
か細い声に気付かない振りで通り過ぎようとしたけど失敗した。
大人が誤魔化すのは自分たちを傷付けないためだ。
相手を傷付ける誤魔化しは悪い大人のやることだ。
私はまだ悪い大人のつもりはない。

箒を止めて、首だけ振り返った。
「なんだ？」
氷精はワンピースの裾を強く握って二つの大きな皺を作っていた。
寒くはないだろうに、ぎゅっと掴んでいる。
「また、ね」
絞り出すように出した言葉は、怒られるのを怖がっているみたいだった。
「……ああ、じゃあ」
疑問を投げかけるような言葉に、私は数瞬だけ悩んで答えを出した。
いつも通り。
そして振り向かずに飛ぶ。
どんな顔をしているかはわからない。
けれど、それ以上を言う気はない。
気持ちだけ、箒の速度を上げた。
「……また、ね」

風の音に紛れて、もう一度確かめるような声が遠くから聴こえた気がした。
聴こえないフリは悪い大人だったかもしれない。
いくらかの逡巡を置き去りに霧を抜けた。
箒の加速に合わせて風が迎えてくれる。満足に吸えずにいた空気を大きく吸い込み、沈んだ空気を吹き流す。
重たい雲の下には紅い館が見える。
色彩鮮やかに彩られた庭で草木に世話をしてる紅い奴を見つけた。向こうも気付いたようで、ゆっくりと箒を地面に近付ける。
「いらっしゃい」
「よう、忙しそうだな」
小さな如雨露を片手に花壇を見ているだけだとあまり大変そうには見えないが、数だけはやたら多い。
「貴女ほどじゃないわ。パチュリー様が言ってたわよ。いつでも私を手伝いに行かせるって」
水を使い切った如雨露を花壇の脇に置いて美鈴は私を正面から見る。お節介で世話焼きだけど、求めない限りは手を貸さない。

温かくて乾いた、いい奴だ。
でもそれに甘えるわけにはいかない。
「はは、自分では行かないんだな」
「仕方ないじゃない。それじゃあ返す事にならないって駄々こねるんだもの」
流石、解ってる。
「そうだぜ。返した事にならない。だからお前はここで仕事してろ」
軽く応える私に美鈴は大げさに肩をすくめる。
「あんたたちは――」
おっと、説教はごめんだ。
「じゃあな。あぁ、そうだ。湖でちょっとおかしな生き物がいるから、退治した方がいいぜ」
言葉を紡がせる前に箒を滑らせる。『仕事』を与えれば私なんかに構ってられないだろ。
「え？　何かいる？　見えないけど」
こんなところから見えるのか。
「いいから行って見てこいって。忙しいのは変わらないだろ」

「んー……、じゃあパチュリー様にちょっと用事で出てるって伝えておいて」
「あぁ、行ってこい」
後ろ手に別れを告げる。
ゆっくりと館の玄関へと飛ぶ私に、美鈴の声が聴こえた気がした。
「――それじゃ、またね」
でも玄関扉に手を掛けた時には美鈴の姿はなかった。
だからきっと気のせいなのだと思う。
返す言葉はなく、閉じる扉の音だけが返事だった。
玄関ロビーには、誰もいない。
他人の家とは言え勝手を知るほどにお邪魔している。
玄関から伸びる廊下の中で図書館へ通じるものを選ぶ。
紅い館は曇りとは関係なく暗い。
窓の少ない廊下を低く、ゆっくりと飛ぶ。
荷物が、重いから。
だから、低く、ゆっくりと飛ぶ。

けして、狭いからではない。
けして、天井が低いからでもない。
けして、けっして、魔力が衰えたからでは、ない。
この廊下は誰も通りかからない上に外の様子が見れる窓もない。おかげで嫌な考えばかりが溜まってしまう。いっそ目を瞑っていれば関係なくなるかな、なんて疲れた思考をしてるのを自覚したところで目的の部屋のドアを見つけた。
片側が開いたままのドアへ滑り込む。
独特の紙とインクの匂いの中をしばらく飛ぶと、椅子に座る紫の魔女を見つけた。
ようやく会話が出来そうな奴に会えた。
「来たぜ」
「……いらっしゃい。小悪魔、紅茶と……、貴女は？コーヒー？」
「いや、同じでいい。温かいのを頼む」
ぺこりと軽い一礼をして小悪魔が去っていく。
あの小悪魔はいつからこの図書館にいて、いつまでこの図書館にいるのだろうか。

ふっと浮かんだ疑問の答えを探そうと、消えていったドアの方向を見詰めてしまっていた。
「どうかした？」
案の定部屋の主から怪訝な声を出される。
「いや、なんでもない。ほら、今日の分。そこに置いとけばいいか？」
ぶっきらぼうに答えたのはこのやり取りが初めてどころではなく、何度も繰り返したことだからだ。
「ええ、小悪魔が片付けてくれるわ」
「よっと」
別段重くはないものの掛け声を出しておく。
それが必要な魔法の式とでもいうように。
いつからか用意された館の様式のワゴン。ここに載せておけば次に来る時には本棚へと戻っている。
実は魔法の式だとでもいうように。
「まだまだ、残ってるわね」
「……ああ、まだまだだな」
分かってるのにわざわざ確認するのは本当に言いたいことを誤魔化すため。

「……そう」
私も、パチュリーだって分かってはいる。
分かっていて何も言えない。
代わりにひとつだけ溜息が零れた。
埃まみれの部屋では響かないものの、吐いた自分の耳にはやけに重く響いた。
「外、寒かったかしら」
「ああ。パチュリーも少し外に出てみたらどうだ？」
興味がないことは知ってる。
興味なんてないのに、こうやって軽く話しかけてくれたのも知ってる。
「……遠慮しとくわ」
「言うと思ったぜ」
「それよりうちの門番が門に見当たらないんだけど？」
以前に聞いたことがある。館の近辺を見る魔法を常時使っているとかなんとか。
ただ『視る』ためには意識を向けなければいけないらしく、タイミングが合わなければ何かトラブルが起きたとして気付かないことが殆んどだとか。

「寒かったからな。運動させてるぜ」
「……そう」
「……ああ」
また会話が途切れる。
何かを話そうか、と考える前に紅茶を載せたワゴンと共に小悪魔が戻ってきた。私たちを挟んだテーブルまで来ると、慣れた手つきでポットを手繰り、温かな空気を放つ液体がカップに満ちていく。
静かな空間に揺れる紅茶はどこか優しい。
「……ねえ」
「……どうした？」
紅茶に魅入っていた私は視線を変えずに応える。
「……っ、なんでも、ないわ」
魅入っていた彼女は魔道書を見ながら黙った。
液体の揺れる音だけが静謐な図書館を支配する。
魔道書は音を立てない。
私も音を立てない。
小悪魔が満ちた紅茶を差し出してくれる。
「うん、ありがとう」

何も言わず、一礼をして小悪魔が部屋を去った。
音が沈む。
紅茶が咽喉を通る音と、ゆっくりとカップを置く音が沈黙の中に沈んでいく。
「パチュリー」
壊すのは、得意だった。
「何？」
でも壊すのは、楽じゃない。
「……あいつは？」
声が震えないように、懸命に堪える。
「安静にしてるわ。ただの、風邪よ」
「そう、だな。寒いからな」
「……ええ」
一口、紅茶を飲む。
温かい。
それに優しい。

――涙を堪えてしまうほどに

カップが軽くなった代わりに程好く身体は温まった。
椅子がつけたカーペットの跡をずらして立ち上がる。
「帰るぜ」
「そう」
温まった筋肉で頬を持ちあげる。
「紅茶、ありがとな。あいつらにも、よろしく」
「……会っていかないの？」
パチュリーの顔はまだ温かくなってないのか視線は本に下がったままだ。
「レミリアがいるんだろ」
こちらを見ようとしないのは知った上で大袈裟に肩を持ちあげる。
「私の出番はないってことだ」
嘘じゃない。
私が顔を見せたって何も変わらない。
「私が、一緒に行けば、多分」
ようやくパチュリーの顔が見れた。
魔道書を見るよりもわずかに勝る事だったんだろう。
けれど私の顔を見て分かったのだろう。

立ち上がりかけた腰は下ろされ、懇願の顔は表情をなくしてしまう。
「いいんだ。ただの風邪、だしな」
「……、そう」
そうしてまたすぐに本と睨めっこさせてしまった。
「ああ、じゃあな」
「……ええ」
これでいいんだと私は思う。
彼女は本に魅入る。
私は箒を手に取る。
「神社に、行くの？」
背を向けたところへ声が投げ掛けられた。
「ああ」
「そう」
「ああ」
いつまでも本に魅入っている。
その内容は一言一句知識の中だというのに。
その内容は彼女自身に無意味だというのに。
それでも魅入ってしまう。

その内容が彼女にとって魅力的過ぎるがために。
その内容を私が受け入れようとしないがために。
私がその魔道を掴むと、信じたいがために。
「じゃあ、な」
「ええ」
彼女は『また』とは言わない。
まだ、此処に来ることを知ってる。
だから、何時までも本を魅入る。
それしか出来ないみたいに。
いつまでも魅入っている。
『人間を捨てる魔道』
彼女には、魅入ることしか、出来ない。
強いることを選ぼうとはしない。
それがこの図書館の主の温かさで、優しさだった。
甘えでもあるし、厳しさでもあった。
けれど私が選んだ道とは違う。
私は振り返りもせずに館の出口へと飛び去った。
静かな紅い館が遠ざかるまで。
歯を食いしばったままで。

「魔理沙が死ぬ。」

この便りを乾と坤の神は見通した。

この運命を紅の悪魔は見通した。

この緋想を天神の娘は見通した。

この境界を妖怪の賢者は見通した。

この記憶を地底の主は見通した。

この真実を誠実なる鬼は見通した。

この真実を尼公と従者は見通した。

この永遠の訪れを月の姫は見通した。

この想望を聡明な道士は見通した。

この残り灯を死神と閻魔は見通した。

「魔理沙が死ぬ。」

誰が洩らしたか、紅白と黒白はそれがわかっていた

誰が洩らしたか、幻想郷でそれを知らないのは

魔理沙を知らないと同義だった

魔理沙が死ぬ

この未来はもう、すぐそばにあった

紅い館から真っ直ぐに妖怪の山へと飛ぶ。
「小腹が空いたな」
日射しはないが今は昼時で、ご飯時。
そんな時に行きつけを見つけたなら寄らないわけにはいかない。ゆらゆら立ち昇る煙に近付けば客を呼び寄せるいい匂いがお腹の虫を急かす。
本能に従って降下していくと、明るい歌声がだんだんはっきりと聴こえるようになってくる。
「ミスティア」
「おや、夜でもないのにお客さん」
「夜でもないのに屋台が開いてるからな」
「誰かさんがよく来るからね。はい、今日の献立よー」
削った木片に読みやすい筆文字で幾つかの料理が書かれている。
「達筆だな」
「褒めるのは料理にして欲しいなぁ、お客さん」
「料理もそうだけど、お前は意外と物覚えがいいよな。本当に鳥の妖怪か？」
魚を捌くなんて簡単にできることじゃない。
「才能があるって言ってよ、先生」
「教え甲斐のある生徒で大変嬉しい。この岩魚の定食が美味いとさらに嬉しいな」
「定食にした覚えはないんだけどね。はいはい。岩魚と何品かつけたげます」
「よろしく」
とんとんとん、と根菜を切る音がリズミカルに鳴る。
森の中では屋台の火の揺らぐ音すら大きく聴こえる。
「歌わないのか？」
さっきまでは歌っていたのに。
「ん？　リクエスト？」
「いや、ま、そうだな。お茶と歌があればさらに嬉しいかもしれない」
「歌とお茶ね」
かちゃかちゃと馴染みの湯飲みが現れる。
きっちりといつもの場所にしまってあるのを見ると、どこか気恥ずかしさみたいなものを感じてしまう。
手慣れた動きで屋台の中をくるくると回る。
必要な物は用意したのか軽く口ずさみ始めた。

「はい、後はセルフよ」
一曲の区切りだったのかそこで歌が止まる。
差し出されたごつごつとした土瓶は口からもわもわと湯気を出している。
「こういうのって、どこで手に入れるんだ？」
「ん？　どういうの？」
これだ、と中身の入った土瓶を持ち上げる。
「あー、なんだっけ。んーと、あの眼鏡の」
「香霖か」
眼鏡をかけた物を売り買いしてる奴はそれくらいしか思い浮かばない。
「だったっけ。ま、いいや。そっからもらった気がするよ。僕には面白くもないものだ、とか言ってたような。言ってなかったかな」
「はっはっは、そうだな。香霖ならまさしくそんな事を言いそうだ」
「そんな気ないんだろうけどさ。なんだろ、見下したみたいな、君みたいな面白くない者にはお似合いだよって言われてるみたいでねぇ」
「くくく、そうそう。あいつは何に対しても興味がなさそうな顔してるからな。その癖、人一倍蒐集癖がある。未知のものなんてそこら中に山ほどあるってのに、未知のものほど集めたがる」
知ってることより知らないことの方が圧倒的に多い。
「未知ねぇ……、何がいいんだか」
「何かいいと思うものがある可能性がある、かもしれない、だとさ」
知らないことには興味深い何かがあるかもしれない。
私の親よりも歳食ってるのに、私よりも子供みたいなことを夢見てる。
「なに？　不感症なの？」
「ぶっ、くくっ。く……はははっ！」
「あれ、そんなに変なこと言った？」
不感症って、そりゃ、傍から見たら、そうだよな。
「いやいや、ミスティア。今度会ったら聞いておいてくれよ。くく、枯れてるって意味じゃあ枯れてるんじゃないか。もう随分なじじいだからな」
夢追い人から枯れススキか。

「覚えてたらね。散歩したら忘れそうだけど」
「鳥だけに」
「鳥だけにね」
「忘れないうちに私の岩魚を頼むぜ」
「はいはい。もうちょっと待ってね」
ぱたぱたと草履の音が去ってゆく。
もう香霖の名前すら忘れたことだろう。
掴み慣れた湯飲みで淹れたばかりのお茶を飲む。
文字を教えたのは気まぐれに過ぎなかった。
気晴らし、と言った方がいいくらい。
今にしてみれば『自分の生きた証』をなんでもいいから残したかったとも言える。
必死になって。
必死になってから、ようやく自分の証を消しに走ってるっていうのに、逆に自分自身を残したくなった。
結論からすれば、良かった。
いつもの遊びができない分、時間潰しには役立った。
なにによりミスティアの文字を見てると小さな達成感を感じる。

元々読むのに困らない程度の知識を持っていた彼女に基本の文字のつくりと書き方の注意、あとはひたすら練習と、新しい文字の習得だけ。
お店で使う文字はしっかりと漢字まで。
平仮名は勿論、片仮名もマスターした。
店の営業努力としては十二分だろう。
お品書、と書かれた木片を眺める。
胸をくすぐる達成感がここに詰まっている。
「他のがよくなった？」
「ん？　いや、そうじゃないさ」
戻ってきたミスティアの手には焼き魚とご飯、味噌汁が乗ったお盆がある。
「こういう場合はなんて言うんだろうな」
「どういう場合？」
「雀が魚を持ってやってきた？」
呆れた溜息を吐きながらお盆から順に私の前に料理を置いていくミスティア。
「私は小骨が多いらしいよ」
「漁夫の利にはありつけそうにないな」

「小食なんだから欲張らないの」
お盆が空いたところでミスティアが何かを切って岩魚の皿に載せる。
「はい、酢橘」
「酢橘？　そんなの手に入るのか？」
幻想郷じゃ生育されてない柑橘じゃないか。
「どっかのスキマさんが里に大量入荷させたらしいよ。おまけでいくつかもらえた」
「あいつは……相変わらずよくわからんなぁ」
「なんでも里には狐さんが持ってきたんだって。風呂敷包みでたくさん持って来たかと思えば『まだ二山ございますので』ってさ」
「なんだそれ」
「……あんたの親父さんが言うにはね、需要よりも多くの供給をもって混乱を避ける、とか」
「ああ、なるほど。それにしてもなんで藍に。それこそそのまんまスキマで里に持ってくりゃ分ける必要もないだろう」
いや、分ける意味があるなら別か？

藍なら酢橘の風呂敷くらいひとつふたつ増えても里まで飛べるはずなんだから。
「それも親父さんが『ああやって最初に限定的に見せておいて後から足していく。そうすることで消費者の期待を底上げする。買う側は欲しがり、売る側は補充の約束を得ている。ちょっとした祭だな』って」
最初の分で需要が低そうなら足さずに終えることもできる、か。
「随分回りくどいことをするな」
「そうだね。そうそう、その後も親父さんの話を聞いてたんだけどね『賢者殿は意外と見栄を張りたがる。そんなことしなくとも既に得ているというのに』って言ったらさ、スキマが後ろに開いて『人里にも偶の刺激がないといけませんわ。弾の刺激がございませんからね』って。もうビックリだよ」
「ふぅん。どうせ紫がどっかから覗いてると見越して、噂話でおびき寄せたんだな。やるな親父」
「あのね、間に挟まれた私はどうすりゃいいのよ」
「酢橘をもらえたんだろ？」

いくら大量に出回ってて長持ちしないからってただでもらえるわけはない。その会話に混ざってたおかげで、紫から渡されたとかそんなオチだろう。
「う、それを言われると……、うーん……」
「酢橘、か。植えるには時期が悪いな」
「親父さんは栽培するって」
「無理だな。紫が偶でいいって言ったんだ」
「幻想郷はすべてを受け入れるんじゃないの？」
「独占禁止法はあった方がいい。親父もそれはわかってるはずだ」
「じゃあなんで植えるのさ」
「そりゃ焼き魚を美味しく食べるためだろ。鍋とか」
キュッと潰すと汁が岩魚に吸われていく。
「あー……、個人用？」
「そうだな。本気で栽培する気なら里ぐるみでやるべきだ。筆頭に立って、人足も霧雨商店から出せば商品としてはほぼ独占はできる。ついでにちゃんとした種、苗、栽培法を紫からいただく。そうすることで許可も取れるし、余るくらいに手に入れば独占する必要もなくなる」
「それをしないから個人用？」
「そうだ。そもそも酢橘じゃ利益が見込めないだろうからな。趣味だろ」
大体人里の商売で一人勝ちなんてできるわけがない。人も金も決まった数しかいないんじゃレースにすらならない。
「ふぅん、あの親父さんもいい意味で変わってるなぁ」
「もってなんだ。もう一人は誰だ」
聞くまでもなく私を言ってるんだろうけど、別に私は変わってなんかない。
「魔理沙はあの親父さんの娘だねぇ」
「……そうだな。生き方は違えど、あそこで学んだことが自分のなかで生きてるって実感はある」
「商人の娘、ね。霧雨魔法商店はどうなのよ」
「今日も商売繁盛で閑古鳥が騒ぎ放題だぜ」
「商才はあっても商品がない、と」
「いや、商品はあるぜ。需要もある」
「何がないのよ？」
「客がいない。どいつもこいつも盗ってくばっかりだ」

「元が盗品なんでしょ……」
「ミスティア。外の法律ではな、借りてるものを勝手に回収してはいけないという大事なルールがあるんだ」
「はいはい。人のものを勝手に盗っちゃいけないっていうルールもあるわね」
「ちゃんと断ってる。借りてるだけさ」
「そう。それで、完済できそうなの？」
借りた物は返す。
それがルール。
「……ああ、まだもうちょっとかかるけど」
「うん、頑張って」
「ん。ありがと」
ご飯を食べに来ただけのつもりがここだとつい会話が弾んで長居してしまう。文字を教えていたこともあって互いの距離や事情も解っている。
文字を教える前までは知らなかったけど、ミスティアは色々なところへ出て回っている。仕入れに人里。魚を獲るのには山の妖怪や神に断りを入れている。料理の研究に紅魔館の図書館へ通ってもいた。
だからか、私の情報も入る。
久しぶりに里帰りを果たしたことも。
図書館に本を返しに通っていることも。
だからこの距離感は居心地が良かった。
結論から言えば、私の気まぐれは大成功だった。

§

「ごちそうさま」
「ん。もうおでかけ？」
「そうだな。あまり邪魔してもいけないしな」
「そ。じゃあまた明日」
「ん。いくらだ？」
「え？」
なんだその鳩が豆弾撃たれたような顔は。
「え、じゃない。そうだ。丁度いい。今日までの分をまとめて払おう。そうしよう」
借りたものは返す。
それはルールだ。

「そうしようって、また勝手な……」
「ツケはなしでいこう。うん」
「もー……、うーん……」
「忘れた、はナシだ」
それならそれで、私が覚えてるより多く払うだけ。
「私の専売特許を取らないでよ」
「いやいや、それだと妖精だって商売やれるぞ」
なんで誤魔化そうとするかな。
「うー……、そうだ、それ！」
「ん？　これ？」
私の持っている私専用の湯飲み。
文字を教えるのあたって自分のを持ってきた。
それ以来ずっとここに置いて使っている。
お気に入りのひとつ。
「それ、魔理沙が使わなくなったら、私にちょうだい」
「……え？」
それ、は。
私が使わなくなるってことは――
「いい、でしょ？」

「……いいの？　こんなので」
「うん。よし、決定。今日の分も明日の分も。明日の明日の分もそれで支払いね」
やばい。
「……うん」
涙腺が緩む。
「もう、泣かないでよ」
「泣いてない、泣いてないから」
「はいはい。それじゃあまた明日」
零れ掛ける涙を抑えて笑顔を見せる。
「うん、また明日」
笑顔で返すミスティアに手を振って箒に乗る。
『自分自身を残したくなった』
少なくとも彼女のもとには何かを残せたんだと思う。
また明日。
明日もお昼を食べに行く。

私が、あの湯飲みを使わなくなるまで。

§

魔法の森。
鬱蒼と茂る木々と漂う瘴気に阻まれ、地面にまで日の光が届くことのない場所。
人も妖精も好まないこの場所に、魔法使いは住む。
魔法の研究に必要な素材を得るため。
あるいは人が好まない場所であるが故に。
みだりに近寄らせたくないが為に。
とんとんとん。
「アリス、入るぞ」
気持ち、声が小さくなった。
また何か言われるんじゃないか、と怖がっていてはいけない。
私はアリスの友達だから。
そんなことを怖がっていては笑えない。
カチャ。
宣言から数秒、ノブを回す。
鍵はかかっていなかった。

特別頑丈な魔法錠がかけてあった以前が嘘のようだ。
今は、そんな時間すら惜しんでいるのだろう。
「アリス、来たぜ。少しは休憩したらどうだ」
アリスは忙しい。
新しい研究のせいで。
「魔理沙、もう少しよ」
びくっ、と身体が震える。
心臓を鷲掴みにされたかと思った。
「アリス？」
私が呼ばれたのかと思った。
「ふふ……、もう少し、もう少しよ。魔理沙」
部屋の隅で同じ台詞を吐き続ける少女。
アリス・マーガトロイドは私を見ていない。
眼を見ればわかることだった。
違う。
もっと前から解っていた。
アリスはそうなってしまったのだと。
知ってはいても、理解はできない。
たとえ事実でも、納得したくない。

「アリス、紅茶入れたんだ。休憩しようぜ」
新しいカップに紅茶を淹れた。
湯気がのぼる。
夜には涼しくなるだろう。
ここらで温かい紅茶の一杯くらい飲んでもいい。
私ならそう思う。
アリスなら一杯と言わずに、時間をかけて数杯を空にしてから作業へと戻る。
それが今は違う。
「魔理沙……」
「アリス、ここに置くぜ」
机には置けない。
前に置いた時には大きな染みを残してカップの残骸が無残に転がっていた。
今はもう置き場所すら空いてない。
窓辺に、小さな机がある。
私がこの家に来る時に窓から入ろうとしてたから。
それを見張る人形を置くために、専用の机を設置したんだそうだ。

机だけは残って今はその人形はいない。
人形を置くだけだった小さな机にカップを置く。
都合、私の分も淹れた。
「もう少し。もう少しなのよ、魔理沙……」
立ち上る湯気は暖かい。
「それは聞いたぜ、アリス」
窓の外は変わらない、見慣れた風景。
「魔理沙……」
私の名を呼ぶアリスの眼はこちらを見ていない。
魔眼。
魔法によって強化し、変質した眼。
変貌した眼が視ているのは一体のヒトカタ。
『霧雨魔理沙』
魔理沙になるヒトカタ。
ある時を境にアリスはそれしか見ていない。
そのヒトカタだけを視て、そのヒトカタにだけ触れ、そのヒトカタにだけ語りかける。
呼ぶ名は――
「魔理沙」

「私はこっちだぜ。アリス」
他の物も、他の者も見えない。
食事も必要としない。
完全な魔法使いとなったアリスに食事は不要だった。
おそらく睡眠すらも必要とせず、眠らずにそれを造り続けている。
完全自立人形。
いつだったか、そんな夢の話をした。
それを作るのが今の目標なのだ、と。
「アリス。また来るから。これ、冷めないうちに飲んでくれよ」
反応のないアリス。
いつまでも私にならない私を抱いて語り続けている。
もうすぐ、もう少し、もう少しよ、と。
それは私じゃないと引き剥がすことはもうしない。
そんなことをする権利はない。
ひどいのは、私の方なのだから。
家の扉まで歩く。
服の上から心臓を守るように胸を掴む。

この時が、一番怖い。
部屋には無数の私がいる。
私の残骸。
私の腕。
私の脚。
私の胸。
私の服。
私の髪。
私の顔。
私のすべて。
魂以外のすべてがここにはある。
なにが成功なのかはわからない。
それでも『失敗作』と烙印を押された『私』が部屋には無造作に転がっている。
机にも。
床にも。
棚にも。
主人が寝るはずのベッドにも。
この家に私の為り損ないがいない場所なんてない。

不気味な私を見ない努力はできる。
増える失敗作は人の形を持ってないものだって多い。
なのに家を出ようとする度に錯覚に襲われてしまう。
背を向ける私に声を持たないヒトカタが呻く幻。
『お前もここに混ざれ』
掴んだ胸がばらばらにならないように力を込める。
加速する鼓動が止まらない。
耳鳴りで前後の感覚が分からなくなる。
「また、来るから」
手を伸ばす。
倒れるように掴んだノブを捻る。
振り返らずに言葉だけを投げて扉を開け放った。
外の空気が明るすぎて気持ち悪い。
眩暈で倒れる前に扉を閉める。
箒に両手で寄りかかり、杖にして身体を支える。
「う……っ」
吐き気がひどい。
視界が滲む。
堪えた。

咽喉からせり上がるものを堪えて、飲み込んだ。
強烈な不快感でさらに涙が零れた。
短く息を吐いて痙攣する横隔膜を落ち着かせる。
「アリス……」
ぼろぼろと零れ落ちてゆく。
思い出が幻のように落ちていってしまう。
変わり果てた親友。
変えてしまった私にできることをずっと考えていた。
私が人間としてできることを。
今の私にできることは限られていて、明日も変わらず
に紅茶を淹れに来ようとしか思い至らなかった。
「また、明日」
いつかを取り戻せたら。
そんなエゴをどうしても諦めたくなかった。
涙を拭いて箒を跨ぐ。
魔法の森の瘴気を抜ける。
空が近くなり、空気が変わった。
その瞬間に胸が楽になった事が。
たまらなく哀しかった。

§

参道の上を飛ぶ。
途中途中に大きな鳥居がぽつんぽつんと立っている。
曰く、この参道を行く限り妖怪に襲われないだとか。
人からの信仰も得ようとしてなのだけど、その参道を
飛んでる途中に行き交う人間なんていない。
「河童が全自動の階段でも作れば、あるいは？」
妖怪に襲われないとしても妖怪の山の頂なんかにある
神社が里から遠いことは変わらない。
人間がこの長い長い山の頂上まで階段を上っていく、
というのは非常につらい。
「信仰自体は分社で補ってるからいいのか？」
神奈子や諏訪子はそこらへんが巧い。
巧いがゆえに、切り捨てる部分は切り捨てる。
非効率で利が見込めないものには手をかけない。
もう少し無駄に人のために何かしてもいいような気が
するんだけど。
そんなことを考えてるうちに例の御柱が見えてきた。

御柱。
守矢神社の結界。
鳥居の結界の中でさらに御柱による結界。
紫に聴いた話ではさらに注連縄で結界を要しているそ
うだけど、そうするとこの神社は結界だらけということ
になる。
なんだか秘密だらけみたいだ。
「そういえば、マヨヒガにも鳥居があったな」
あそこも特殊な結界で囲われた場所だ。
「マヨヒガってどこだい？」
何の前触れもなく耳元で囁かれる。
「うお？　お、諏訪子か。重く、はないけど。いきなり
人の箒に乗らないでくれ」
不自然なくらいに重くない。
飛べるんだからおかしくないかもしれないけど、体重
を感じないみたいで感覚が狂う。
「重くないなら良いでしょ。さぁさ、社まで飛ぶのだ」
肩に手をかけられて体重とは別に存在を感じる。
遠慮はしてるってことにしとくか。

「へいへい。それで、マヨヒガを知らないのか？」
行こうと思っても行けない場所だけど、全く辿り着けない場所ではない。ひょんなことから迷い込むことはよくあるし、結界が理解できるなら自分の意思で入ることもできると思う。
「文献でなら聞いたことがあるね。ここは、本当になんでもあるんだねぇ」
外の世界の方が物は充実してるんじゃなかったか。
何時でも何処でも好きなものが手に入る。
利便性を追求した世界。
「なんでもはないさ。ないものがあるだけで」
「お、ちょっと悟ったことを言いおってからに。それでマヨヒガはどこにあるのさ」
諏訪子の言ってる文献でのマヨヒガと幻想郷のものは同じかもしれないけど、私の中での認識は違うものだ。
「紫の住処だ。どこかにはあるが、どこにもないのかもしれない」
これで伝わるはず。
伝承の場所ではなく、幻想郷に存在する空間。

「……ああ、そういう類。八雲の大妖の住処ね。じゃあ私らは相容れないかもしれないね」
「どうだかな。さて、着いたぜ。降りな」
一番大きな鳥居を越えて社はもう見えている。
諏訪子がぴょん、と箒から跳んだのを確認して地面へ着地する。
「ん。早苗に用だった？」
話が早い。
「おう。それとお茶」
「おやおや、神使いの荒い奴だね」
けろけろと咽喉を鳴らす諏訪子は別段非難するのでもなく、茶化しているだけのようだ。ここの神様はどっちもとっつきやすい性格をしてる。
会話はしやすいけど、威厳とかを感じることはあまりない。たまに出る突拍子もない行動や神出鬼没さがなければ神様らしさも感じないだろう。
「箒の乗り賃の請求さ」
まぁ、幻想郷にはそんなのが山ほどいるし、突拍子もないのは山より多くいるけど。

「む、そうきたか。じゃ呼んでくるよ」
「よろしく頼むぜ」
ぴょんぴょんと跳ねていく諏訪子。
母屋に行くと思っていたけど、本殿の中へ入った。
「え？　魔理沙さんが来てるんですか!?　すぐに行き、い、いたったっ！」
どこか慌てた早苗の声が聴こえる。
どたばたぴょんぴょんどたばた。
不揃いなふたつの足音が近付く。
「お待たせしました！　魔理沙さんっ」
「……言うほど待ってはないんだが。それより諏訪子、お茶はまだか？」
「あーうー、仕方ないなぁ……」
「諏訪子さまっ、わた、痛っ、いたた、私がしますっ」
早苗の様子がおかしい。
諏訪子の方を振り返るだけで痛みを訴えてる。
石段から転げ落ちでもしたのか？
「いいから座ってなさい。客の相手をするのが今の早苗の勤めだよ」

諏訪子が母屋の方に歩き出したかと思えば一瞬で姿が掻き消えた。
「神出鬼没、か」
「よ……っと、とと……」
変な声を出す早苗が慎重に慎重を重ねて縁側に座る。
「なんだ？　手伝うか？」
手を伸ばす。
「あ、だめ！　触らないで、ください。今触ると、だめです。だめなんですっ」
そう言われると触りたくなる。けど私の悪戯心を察したのか、もの凄く真剣な眼差しで『駄目です』と脅しをかけられた。
まぁ、いいけど。
「ふぅ、座れた」
「ご苦労。で、どうしたんだ？」
「あはは、何がですか？」
「その状態でそう言えるお前は凄いよ」
誤魔化せると思ってるならもっと凄いが、目が笑ってないからそういうわけでもないだろう。

「麓の巫女に滅多打ちにされたんだよね」
消えた諏訪子が早苗の隣に現れた。
霊夢に？
「ちょっと負けただけで、でぃだだだだだだだだ!!
諏訪子様！　そこっ、触らないで、ください！」
どれだけ力を込めてるのか解らないが軽く触ってるだけにしか見えない。
「ちょっと負けただけでそうなるのか」
諏訪子が触ったのは左の肋骨の辺りだが、痛みに身体を捻った早苗は全身の痛みに悶えて身体を震わせた。
「凄かったんだよ。いや、壮絶だった」
「見てたんですか!?」
「うん」
早苗に応える諏訪子がこっちを向いている気がした。
なにかを訴えるみたいに。
「どうだったんだ？　霊夢の圧勝だとして」
無視。
その訴えに応えるつもりはない。
「うーん、そうだなぁ……、言うなれば——」

すっ、と諏訪子が両手を広げる。
「？」
「？」
パンッ！
「ひっ！」
境内を震わせる鮮やかな拍手。
諏訪子の小さな手の平が出したとは思えない音が響くと早苗が怯え声を上げた。
「こんな感じ、だね」
「……」
拍手ひとつじゃよくわからないが、何故かガタガタと早苗が身を震わせて守るみたいに自分の両肩を抱いてる姿から壮絶さだけはわかった。
「そ、それは災難だったな」
「うん。凄い。相手にすらならなかった。いや、相手にならないように、瞬殺を心掛けた戦いだったね」
それは、なんだか。
「珍しいな、霊夢が」
なんていうか、変だな。

霊夢は基本的にのらりくらり避わして、いつの間にか勝ってるとか。結界を利用してとか。力技で戦うイメージではないんだけど。
「弾幕ごっこをしたくない。させたくないって感じだったね。誰を想ってやら」
諏訪子の容赦のない視線が刺さる。
無視を決め込むには目が合ってしまっている。
「諏訪子様」
早苗の声でようやく視線を外した諏訪子は肩を竦めて早苗のおでこを叩いた。
「誰を想ってなのやら、ここにはその逆を考えてる子もいる、と」
「すーわーこーさーまっ」
「はいはい。お邪魔したよ。ばいばい魔理沙」
害意の消えた目が私を見る。
「おう、じゃあな」
言葉を返したところですぐに姿が消えた。
見えないだけで、今も諏訪子は私が視えていて、あの目をしているかもしれない。

「すみません」
「ん？　何が？」
誰が悪いわけじゃないけど、悪いのを一人出すとしたら私だ。謝られるようなことは、されてない。
「諏訪子様、どうも拗ねてるらしくて」
それは、また、変な勘違いだな。
「拗ねてるんじゃないさ。あれは心配してるんだよ」
「……え？」
「そんなボロボロになってたんじゃ心配もするだろ」
「……はぁ。そう、ですか？」
納得がいかないって顔をしてるけど、身内じゃなくてもそんな姿になってたら心配するだろう。
「自覚ないなぁ。神奈子も視てるぞ、きっと」
「神奈子様には、怪我の手当てを手伝ってくれてましたけど、特に何も」
言葉にはしてない、か。
「あいつは不器用そうだからなぁ。こういう時ってあの二人、二柱か。喧嘩するだろ」
私の言葉に早苗の顔がぱぁっと明るくなる。

「よくわかりますねっ。そうなんですよ。後片付けがいつも大変で。それにどうして喧嘩したのかどちらも教えてくれないんですよ」
「ははっ、そりゃお前には言えないだろなぁ」
早苗に構いたいのに素直に構うわけにはいかない。
そのストレスを互いにぶつけ合う。ある意味じゃいい解消法かもしれない。
「しばらくすると仲直りはするんですが……。あ、でも最近は……、喧嘩も、あまり……」
「そうなのか？」
私の顔色を伺いながら言葉を濁らせる。
誰も彼も気にせずに生きれたらいいのに。
「……弾幕ごっこでの喧嘩は、あんまり」
「ふーん、やれば、いいのにな」
気にせずに、生きて欲しい。
「です、よね!?」
ずいっと、身を乗り出す早苗。
「あ、ああ。いいんじゃないか。それより怪我は大丈夫なのか？」
そんなに動いたらまた全身痛めるんじゃ。
「大丈夫です！　奇跡で治りました！」
「都合がいいなお前の奇跡は！」
立ち上がり鳥居の向こうへ拳を握る早苗。
「よーし、明日も霊夢に挑みますよ！」
いいな。
都合のいい奇跡が起きれば。
「ほどほどにしておけよ。あいつは手加減を……、偶にしか知らないから」
「大丈夫です。私も本気です」
「いや、お前はいつも……、ふふふ、そうだな。うん。頑張れ」
「応援してくれますかっ」
「おう。霊夢のな」
「あー……うー……、いいんです。それでも、きっと、そのうち、多分。霊夢さんに勝ってみせるんです」
絶対は言わなかったか。
ま、それもいいんじゃないか。
「その意気だ」

あの博麗の巫女に勝つ。
何度も何度も挑んだ。
何日も何日も挑んだ。
それが儚い夢だとしても。
夢を抱くことで得るものだってある。
早苗は、いい奴だ。
誰かの代わり、なんて考えは好きじゃないけど。
都合のいい奇跡みたいだけど。
そんな未来なら、応援したい。
「さて、お茶。ごちそうさま」
太陽が疲れて夕日に変わろうとしてる。
そろそろ戻らないと。
「帰られるんですか？」
「あー、うん。寄り道」
家には、帰らない。
「いいじゃないですか。もう『帰る』で」
「いや、違うぜ。寄り道するだけだ」
「はぁ……、それがいいんなら別にいいですけど。霊夢によろしく伝えといてください」
「ん。明日も返り討ちに遭いに行く、でいいか」
「はいはい。それで構いませんよ」
流石に一朝一夕で勝てるとは思ってないか。
「……ヒントだ。霊夢の弾幕にはデコイがない。あいつは空間全てを使って弾幕を展開する。まずは、その空間を理解することだ。それと、逃げ道みたいな隙間は包囲の網だ。逃げ道が欲しいのなら自分で作る。これが霊夢の弾幕を知る手っ取り早い方法だ」
「そ、それが必勝法ですか！」
「いや。そもそも私勝てないしな」
それをやって勝てるならとっくに勝ってる。
「えー……、っていうか、空間の理解とか、よくわかんないです」
「わかるさ。お前にはきっとわかる日が来る」
そんな気がする。
そんな日が、来て欲しいと願う。
「魔理沙さん……」
「じゃあな。あ、こんな事言ったとか誰にも言うなよ」
「勿論ですっ」

COLORS

Ribbon probatur mulierem venustate atque virtutem.
Ornare crinem fascia si femina habeat vitam.
In mea Theoria die et sollicitum.
Erat sane vituperet, "socium" inde laborem.
Litteras trans comentarius Ive 'perierat.
Im 'non amo luteo invidiam.
Sicut ego quasi operculo in tempore ieiunii ante.
Inside est pulcra littera apparuit vere album.
Litterae sine voce est.
"socium" fuerint adhuc suspecti.
Quod pro epistula videri utimur.
Potius quam reperta videbatur.
Ecce iam medium modo facito extra tempus
Ego positum fuit in cum strepitu et Ri Pasa desk.
Signum ab origine quaestio non defuere.
Mysterium quoque sed ad movere nobis.
Buddy vidit photo magnum concluderent corde.
Impedimentum finis, licet oculis ipsum.
Nunc, quattuor photos et literis sunt in pocketbook.
Apertum est heri uni ex realiter.
Pictures nescio quid latens in tenebris ego noctis in latent.
Ut hinc probabit.
Scio quod non sit apertum consequat.

参道を登るように箒で飛ぶ。
こちらの参道には神の守りなんてない。
かといって何かに襲われるかと言えば襲ってくるような妖怪もいない。
妖怪だけなら年がら年中いそうな場所だが。
鳥居をくぐる。
縁側に座る霊夢がいた。
それだけなら普段通りなのに、なぜかその後ろの社が隕石でも落ちた後みたいに壊れている。
「……凄く局地的な地震でもあったのか？」
屋根も抉れて骨組みの柱だって見えてる。
地震じゃこうはならないけど、それにしてもよほどの力をぶつけなければこうはならない。
「え？　揺れたかしら？　それよりおかえりなさい」
まるで何でもないみたいに言う。
いや、それよりも。
「あー……、お前までそう言うのか」
ここは私の家じゃないっていうのに。
「おかえりって言われたら、なんて言うのかしら？」
霊夢の笑顔には圧力が込められてる。
言わないと、入れてもくれないのだろう。
「はぁ……、ただいまだ。それでどうしたんだ、これ」
ちら、と霊夢が後ろを見上げる。
「んー、換気かしら」
風通しどころか雨通しまでよくなってしまって、雨になったら部屋の畳が腐ってしまうだろう。
「そりゃまた豪快なことで」
冗談にもならないが。
「いいじゃない。それよりご飯にしましょ」
「本当にいいのかっ!?」
まるで気にしてないのかふわふわと飛んで母屋へ行こうとする霊夢。
「そのうち萃香あたりが直しに来るわよ」
そりゃ壊れたら直してもらうだけだろうけどさ。
「霊夢、二度も盛大に壊れたからって寛容過ぎじゃないか？　これ、誰がやったんだ？」
「寛容って……、うーん、いいじゃない別に」
歯切れの悪い返事。

犯人を問い詰めて直させようとか、そういう気はないみたいだけど、なんか変だな。
壊れた箇所を見る。
摩擦が凄かったのか丈夫そうな木材が焼け焦げてる。
「誰だ？　この馬鹿力は萃香か？　天子なら不器用だから家ごと壊すだろうし」
「誰が馬鹿力よ！」
「お前かよ!!」
そりゃ問い詰めたりできない。
歯切れが悪かったのもそれか。
「ちょっと変な虫がいたから追っ払ったのよ」
「はぁ……、ほんとお前は手加減ってのを知らないな」
「なにそれ？」
知らないよな。
「少なくとも美味いもんじゃないな」
知らなくていいものだからな。
ま、霊夢が壊したんなら仕方ない。
今日明日で雨は降らなそうだし、汚れた分は後で掃除するしかないだろう。
社は放っておいて、霊夢が先を歩く母屋へ向かう。
これでようやく、今日は箒に乗らないで、済む。

§

博麗神社の台所。
霊夢と二人で夕飯の支度をしている。
「魔理沙は意外と繊細よね」
「意外とは余計」
夕飯の支度をしてるだけなのに、さっきからいわれのない文句を言われている。自分とこの神社を壊すような奴に言われても褒められた気はしない。
嬉しくないわけじゃないけど。
「じゃあデリケート」
「なんで言い直したんだ？」
「指も細くて美味しそうだし」
「霊夢、それは褒めてるつもりなのか？」
何が言いたいんだ。
「どうしてそんな凝った切り方するのよ」

「言いたかったのはそれか！　いいだろ別に」
「どうしてそんな凝った切り方してて早いのよ」
「いつもやってりゃ早いだろうがっ」
「信じられないわね。どうしていつもそんな切り方してるのよ。この乙女」
褒めてるのか貶してるのかどっちだ。
真顔で言われると判断できない。
「ああもう、うるさいうるさい。いいじゃない、どんな切り方しても」
大体霊夢はそんなこと言うタイプじゃなかったのに。
「魔理沙、口調まで乙女になってるわよ」
「……っ、い、いいだろ別に！」
二人での食事の準備だと役割分担になり、どうしても片方が時間の隙を見つけてしまう。私は食材を切ったりなんだり、霊夢はご飯やらお味噌汁やらの火の担当。
「手が空いたんなら手伝ったらいいだろ」
こっちは数が多いんだから。
「なに言ってるのよ。大変なのよ、火の番は」
「ちっとも見てないじゃないかっ」

「じっくり見てるじゃない」
「完全に目も体もこっち向けて言う台詞か？」
「だから、魔理沙をじっくり見てるのよ」
両肩にずっしり重みを感じる言葉を吐かれた。
抜けてくれることを祈って溜め息を吐く。
「見んな。ほら向こう見ろ向こう」
「やだ」
「噴き出してんだよ！　ちゃんと見てろ！　それになんでそんなに強火なんだよ!!」
「やだ、魔理沙可愛い」
ほら、こういうこと言う。
「霊夢、なんか紫に似てきたな」
支離滅裂でよくわからんことをよくわからん時に言うし、人の言葉の大体を聞いてくれてない。
「火を止めるわ。すぐ止める」
ようやく言葉を理解してくれた。
向こう向いてくれたのも助かる。
別に気にしないけど、じっと見られながら料理するのはやっぱりやりにくい。

切り方に文句言われたくもないし。
いいだろ別に、星型に切ったって。
ちょいちょいちょい、って切ればすぐだし。
よし、できた。
ふふふ。
「魔理沙はほんと可愛いわねぇ」
「だから見るなってば！」
問答の末に簡単なはずの料理が居間に運ばれる。
「どうしてこんなに疲れた気がするかな」
簡単なはずなのに。
「気のせいね。私はちっとも」
「そりゃそうだ。お前のせいで疲れてるんだから」
「照れるわね」
「褒めてない褒めてない」
でも適当にやってるように見えて霊夢の料理は旨い。
火加減は上手でご飯はしっとりぱらぱらだ。
一口目を入れた瞬間に負けた気分になる。
「ずるい」
「照れるわね」

「どうしてあんなやり方でこうなるんだ」
少なくとも私にちょっかいかけるのは余計なはず。
「魔理沙の星型にんじんも美味しいわよ」
「え？　そ、そっか？　えへへ……」
一手間かけたのを喜ばれるのは純粋に嬉しい。
うん、お味噌汁も旨い。
「もう……、食べちゃいたいわねぇ」
ぽつり、と零れたみたいな言葉が聞こえた。
多分、無視してもよかった。
私に聞かせるために言ったわけじゃないはず。
「食べてるだろ？」
でもここで無言になったらと思うと耐えられなくて、つい応えてしまった。
「……いいわ、後でじっくり食べるから」
嫌な予感しかしない。
話題を変えよう。
「……よくわからん。そうだ。霊夢」
「なに？　今すぐ？」
目を輝かせてなにを言ってるんだ。

「いや、お前さ。昼間に誰か来たか？」
ぴたり。
それまですすんでいた箸が止まる。
まるで時が止まってしまったみたいで。
「……なんで？」
霊夢の顔が堅いものになったのが怖かった。
「不機嫌になるなよ。早苗が来ただろ」
「あ、あぁ。早苗ね」
箸が動く。
よかった、何か地雷でも踏んだかと思った。
「さっき会って来たんだ。明日も来るって言ってたぜ。お前を倒すんだとさ」
「へぇ。私のところに来ないで早苗のとこなんかに行ってたの」
ん？
「い、いいだろ。別に」
なんでそこを気にする。
「そう、明日も来るの。そう、魔理沙が会いに行ってたのね。ふーん。そう」

ぱくぱくと箸が口へ運ばれる。
澱みない動きで怖い。
あと煮物食べ過ぎ。
私の分がなくなりそうだ。
「変なこと言うやつだな。っていうか、食べ過ぎ。私の残せよ」
横から箸を伸ばす。
「いやよ。魔理沙は私のものよ」
「なんか違うそれっ」
びたっ、と不自然に止まる。
さっきの止まった、とはまるで違う。
急制動をかけたみたいにびくっ、と震えて止まった。
なんか、紫っぽいっていうより、人間離れしてる。
「あなたは私のよ」
「そこ繰り返すかよ！」
なんなんだ一体。
どういう神経してんだか。
霊夢の動きが止まったのをいいのに煮物をつつく。
揚げ出し豆腐から煮汁が溢れてご飯が美味しい。

これで明るい談話を挟んでたらもっと美味しいのに。
「わからないみたいだからもう一回言ってあげるわ」
卓袱台の向こうにいたはずの霊夢が目の前にいる。
「むぐ……？」
こいつ本当に人間か？
「あなたは私のよ」
「む、ふむ……っ」
唇がぶつかる。
まだご飯が口の中に入ってるのに。
「ちゅ……んふ、ん……っ」
「や……、ひた、いへるな……っ」
逃げようにもしっかりと頭を掴まれてる。
足は卓袱台に入ってるし、左手にはご飯の入った茶碗で、右手はまだ箸を持ったままだ。
抵抗したくてももがくしかできない。
「んちゅ……、ん……。ん、ふふ。魔理沙のご飯。甘くて美味しい」
口の中を散々嬲られてようやく解放された。
箸を握ったまま右手を叩きつける。

「お前なぁっ、ご飯時になむ……むーっ！」
「ん、まり、さぁ……ん、ちゅ、んふ……」
やば、霊夢のやつ本気で火がついてる。
いつでも強火かよ。
いい加減暴れるぞ。
「れい、む。まって、ごは……んっ」
「こっちの方が美味しそうだわ」
やだ、最悪にセンスが悪い。
「うあ、ま……、やあ、あとで……ちゃんと……」
左手に残っていた茶碗も奪われ押し倒される。
「ん……ふむ……んちゅ……」
聞いてくれない。
口を塞がれて言葉も封じられた。
熱くて荒い息が頬を撫でるせいで逆らう気力を奪う。
だめだ、このままじゃ、流される。
「れぃ……む、ま……っ。お、ふろ……と、ふとん、をしいて……」
こんな居間でとか、やだ。
「お風呂は後でね。布団なら敷いてあるわよ」

しゅぴっ、と霊夢の札が飛んで襖が開く。
隣の部屋には布団が綺麗に敷いてあった。
「な、な、なんで。まさか敷いたまま!?」
「失礼ね。ちゃんと干したりしたわよ」
あのままじゃちょっとね、敷布団は変えたし、とか、そんな声が遠くから聴こえる。でも私の耳には入ってるけど頭には届かない。
「ば、ばっ、ばかじゃないの……」
盛ってるわけだ。
ご飯を食べる前からそのつもりだったんだから。
「莫迦でいいわ」
ひょい、と抱え上げられる。
そのままなんでもないみたいにふよふよと飛んで行く霊夢を止めたり、睨んだりすることもできず、ただ顔が熱くて、胸が苦しくて、両手で顔を隠すしかできない。
「莫迦で構わない」
襖が閉まる音がする。
灯りのない部屋で、霊夢の声と体温と自分の鼓動だけが世界の全てに変わる。

「ずっとこうしてられるなら、莫迦でいいのよ」
それは。
うそだ。
私の胸に顔を埋める霊夢が泣いてるように見える。
泣き声が聴こえるわけでもない。
冷たい涙で濡れたわけでもない。
嗚咽で胸が震えたわけでもない。
ただそう見えた。
暗闇で互いの顔すらわからない。
でも泣き声を感じた。
だから手を伸ばした。
泣きだしてしまった子供をあやすように。
全ての悲しみには終わりが訪れると願うように。
私の優しさを全部込めて霊夢の黒髪を撫でる。
「私はここにいる。霊夢の傍にいるから」
何処に行ったとしても。
最後にはここに帰ってくる。
霊夢の隣に。
「随分、余裕があるみたいね」

「……え?」
身体を起こした霊夢の髪が私の首をくすぐる。
顔は見えない。
暗い部屋に目が慣れてきても下から覗く私には霊夢の表情はわからない。でも怖いくらいに強く掴まれた手首から嫌な予感だけをひしひしと感じてた。
「手加減する気もなかったけど、この分だと朝までもでも大丈夫そうね」
「……あの、霊夢?」
泣いてるなんて、誰が想ったんだろ。
あの時から霊夢の言動もおかしかったから、変な夢でも見たのかもしれない。
「泣いても赦してあげないから」
霊夢の髪がさらに垂れてきた。
髪を纏めるリボンを取ったのかな。
あ、本気だ。
「ごめん、ごめんってば、ちょっとれい、んむ……」
夜は永いのに。
私は口答えすら赦されないみたいだった。

§

雀たちの鳴き声が聴こえる。
会話をするみたいにチチチチ、と交互に交わす鳴き声で胡乱としていた意識が醒めていく。
「おき……なきゃ……」
できるだけゆっくりと布団から出る。
霊夢は起きない。
以前に頑張ったけど、断固として起きなかった。
多分、私が出かけるのを見るのが嫌なんだろう。
起きたくないなら仕方ない。それならそれで、できるだけ起こさない努力をするだけ。
朝ご飯くらい、一緒にできたらいいのに。
霊夢から借りてる浴衣を着てお風呂の用意をする。
朝のお風呂は寒いからあまり好きじゃないんだけど、流石に入らずに出掛けるわけにはいかない。水になってはいるけど、お風呂の用意だけはしてあるので八卦炉で火を入れて身体を洗う。
「いっ……たい……」

お湯が沁みた。
噛むことないのに。
昨夜の傷跡が赤く浮き上がってる。
服で隠れるからいいけど傷はつけないで欲しい。
生きてる実感は辛いばっかりだから。
「まさか、ね」
そのために付けたわけじゃないはず。
無意識のうちにならあるかもしれないけど。
やっぱり一人でじっとしてると、考え過ぎる。
さっさと出よう。
今日も色々と回らないと。
昨日の夕飯の残りを温め直す。
白米はないけど、しょうがない。
霊夢が使ってた食器も一緒に洗って水切りさせる。
「ふぅ……」
用意していた替えの服に着替える。
そう言えば洗濯とか普通に任せちゃってるな。
ついでだから気にしなくていいって言いそうだけど、夜にありがとうって言わないと。

「……その会話が出来ればいいんだけど」
せめてご飯くらい食べてからすればいいのに。
考えて、気付く。
「なんですること前提なの……」
抱えた頭に帽子を深く被せる。
私のせいじゃない。
起きる気配のないこいつのせいなんだ。
霊夢は止めない。
そこには感謝してもしきれない。
私を私でいさせてくれる。
だからじゃないけど、少しくらいの我侭は受け止めたいし、喜ぶ顔だって見たい。
「……その……い、いってきます」
ただいまは恥ずかしくて言えないけど、寝てる今ならこれぐらいは言える。
ぴくっ、と霊夢の眉が動いた。
起こすのも悪いしそそくさと出掛ける。
いってきます。
帰ってくるから。

§

朝靄の煙る神社から魔法の森へ飛ぶ。
魔法の森は歩いていけば途端に迷う場所だ。
地形に特徴がありそうなのに、いざ目印にしようとするとそんなものが無い。変哲のあるものを目印にしようにも、どこもかしこも変哲だらけ。
一度行ったことがある場所、なんて油断して歩けば、既に姿かたちを変えてることはよくある。
そんな森でも長年住めば庭と同じようなもの。
霞がかかった森の上空からでも自分の家の位置くらいはすぐにわかる。
これも私が生きてきた証のようなものだ。
「……ただいま」
いまや実家になってしまった我が家。
静まり返った家が出す返事は床の軋みくらい。
「ひろく……なったなぁ……」
静まり返った家には以前のような狭苦しさがない。
よく床が見えないなんて言われたものだった。

借りた魔道書を整理して伽藍とした棚。
その魔道書も全て持ち主に返す。
私が自分で記した研究書や魔道書なんかもあの図書館に寄贈する。百を生きる魔女には大した内容ではないかもしれないけど、延滞料代わりに受け取ってもらう。
ベッドに座ったらそのまま眠ってしまいそうなので、手早く今日持っていく分を包んで家を出た。
元から鍵なんて掛けない主義だったけど、そんなものは必要なくなった。
この家に在るものは、必要最低限の生活用品と、持ち出すほどではない私の服くらい。
ガラクタと称されるものは無理矢理売っぱらった。
香霖には呆れ顔をされたけど、仕方ないな、と常套句が出たからあいつはあいつで得をしたのだろう。
今の私に残ったのは、箒と帽子、そしてミニ八卦炉の三つだけ。
それだけあればもう十分だ。
行こう、時間は限られてるんだ。

§

紅魔館とミスティアの屋台、アリスの家を訪ね、最後に守矢神社に来た。
「ああ、魔理沙さん。どうも」
「なんだ、意気消沈して、また勝てなかったのか」
昨日二人を焚きつけたから気になって来たけど、怪我して立ち上がれないとかなってなくてよかった。
「勝ち……？　あ、ええ。また負けました。もしかして魔理沙さん何か霊夢さんに言いました？」
「昨日言っただろ。また勝負を挑みに来るから返り討ちにしてやればいいって。それは言ったけど、どうかしたのか」
それを聞いた霊夢の様子は変だったけど。
「それはもう容赦なかったです。昨日よりずっと。長引いたりしなかったから怪我は少なかったですけど」
「そいつはご苦労さん。明日もまた挑むのか？」
「ええ。心配ですし」
そっかそっか。
あれ？
「ん？　心配って？」
「へ？　えっと、私そんなこと言いました？」
「言ったと思うけど、聞き間違えるような単語か？」
「えぇっと、その、魔理沙さんに勝った報告ができるかどうか、心配……っていう、その……」
それは、また。
「大胆だな。そんなに早く勝つつもりか」
「え？　え、ええ。って、なに言ってるんですか。勝つに決まってるじゃないですか。勝ちますよ。だからそれまで待っていてくださいよ。絶対ですよ！」
詰め寄る早苗に捲くし立てられる。
「あ、ああ……。いや、だからさ、私は霊夢の方の味方なんだってば」
あまりの迫力に頷きかけた。
あぶないな。
もう、できない約束はしたくないんだ。

§

「おかえり」
昨日と同じ場所で霊夢が待っていた。
「お、もう直ったのか。流石に早いな」
ぐしゃぐしゃだった社は綺麗さっぱり直っていた。
「おかえり、魔理沙」
うぅ……、避わせたと思ったのに。
「た、ただいま」
やっぱり、なんか、恥ずかしい。
ちゃんと帰ってくるって言ってるのに。
「じゃあご飯にしましょうか。手伝ってね」
「ん。今日は土産もあるから」
丈夫に包まれたヤツメウナギを見せる。
「へぇ。楽しみね」
「ミスティアからもらったんだ。タレをかけて火で炙れば屋台じゃなくても食べれるって」
同じ味は出せないかもしれないけど、夜に来れない私のために捌いてくれた。
「ウナギね。精力付きそうだわ」
「な……っ、ば、ばか。そんな、そんなつもりじゃないからなっ」
なんでもそこに繋げようとして。
そりゃ、栄養はいいかもしれないけど。
「それじゃあご飯炊いて……、汁物と、副菜は？」
軽く流したな。
あんまり本気じゃないのか。
「そう、だな。野菜かなにかある？」
本気でそればっかり考えられても困るけど。
「そうねぇ。さっぱりしたものにしましょうか。適当に用意するから、魔理沙はそっちのお願い」
「うん、任せて」
一足先に台所に入る。
折角ミスティアに作ってもらったんだ、美味しく作らないと。開封すると独特の生臭い匂いと、二重の包みの前に手紙が同封されていた。
「霊夢。日本酒ってあるか？　タレに少し混ぜて炙るといいみたいなんだけど」

「酒……？　昼間に萃香が呑んだから、ないかも」
「そっかぁ、じゃあしょうがないな」
ひょい、と肩口から霊夢が包みを覗き込む。
手紙を開いて見せてやる。
「あの鳥が書いたの？」
「綺麗だろ。みりんならあるかな。霊夢、ご飯が炊けてから焼いた方がいいよね？」
調味料の棚を漁る。
あったあった。
「そうね。丼にしてもいいかも」
「ああ、いいなそれ。美味そうだ。ミスティアにも提案してみよう。美味かったら新メニューだな」
七輪はどこにやったっけ。
こないだ魚焼くのに使ったはずだけど。
「魔理沙、ちょっとだけご飯の火見てて。まだ大丈夫と思うけど」
「ん。任せろ」
ああ、こっちにあったか。
炭も一緒にあるな。

ご飯は……、火を入れたばかりか。
それなら確かに大丈夫そうだ。
炭に熱を入れとこう。
あれ、野菜を出すだけで切ってもないじゃないか。
「適当に、って言ってたし、適当でいいよね」
ご飯が炊けないとどうしようもないし。
おっと、味噌汁の出汁を取って……、あれ、具は何を入れるつもりだったんだ。
「準備だけはしてあるんだけど……」
まぁ、いいか。
適当で。
ざくざくと切って白菜とえのきを用意しておく。
えっと、副菜はどうするんだ？
切るだけ切ればいいのか？
ちょっとって言ってたのに霊夢遅くないか？
「んーと、タレの味はこんなもんなのかな」
みりんの量は隠し味程度でいいよね。
「お待たせ」
「長かったな。そろそろ炊けるんじゃないか？」

流石にまだだけど。
「魔理沙のえっち」
「はぁっ!?」
いきなりなに言い出すんだ。
「人のご不浄の長さなんて数えちゃって」
「誰も数えてないし。もう焼くぞ」
そっちの作業は全部任せた。
大体はやっておいたから、大丈夫のはず。
「美味しく焼いて、精力ばっちりつけるわよ」
またそういうこと言う。
「後半は知らん！」
霊夢の戯言は無視して網に串焼きを乗せる。
八卦炉で火力を調整しながらじりじりと炙る。
塗したタレが零れて炭に落ちると、タレのいい香りが台所に満たされていく。こうなると楽しくなってきて、美味しいものが出来る予感に心が沸き立ってくる。
「よし、こんなものかな」
焼き目がついて美味しそうだ。
「できた？　他の運んじゃうわよ」

「ん。皿だけちょうだい」
「そこに置いてあるから使って」
お、用意がいいな。
ご飯も炊けたみたいだし熱いうちに食べないとな。
「はい、いただきます」
「いただきます」
残ったタレを満遍なくかける。
丼に盛られた身から美味しそうな匂いが零れている。
酒の肴っていう認識しかなかったけど、これならお昼に出してもいいんじゃないか。
「美味しいわね」
あ、先越された。
身をほぐしてご飯と一緒に口の中に放る。
「あふ……、ん。うん、美味い」
「家でできるなら屋台やめて販売にしたらどうかしら」
「おいおい、歌と美味しい肴を出してくれる屋台だろ」
「そうだったかしらね」
うん、あそこの良さはあの雰囲気もあってだもんな。
それに、昼の客は私くらいしかいないし。

「そうそう、今日な――」
パチュリーと話した研究のこと、咲夜がまだ元気にならないこと、小悪魔の紅茶の腕がだんだんとあがってること、一日は永いようで、短い。全てを話せてしまえるぐらいには短いし、全てを惜しむくらいには永い。
ミスティアがくれたヤツメウナギの包みを見て、早苗と既製品の販売を信仰のために始めるのはどうか、なんて話をしたのも口に出す。
霊夢も言っていたけど、手間のかかる料理ならそういうのは喜ばれるのかもしれない。
「神奈子主導じゃ失敗しそうだわ」
「詰めが甘いからな」
あるいは目的がずれてるのか。
その日起きたことを話すのは日課になりつつある。
今日の分を話しきった頃に夕飯はなくなった。
「精力もついたことだし、運動しましょうか」
これがなければ、なぁ。
「霊夢、もう少しセンスを磨いてくれない？」
するのは……いいんだけど。

もうちょっと、こう、雰囲気のある切り出し方とか。
「例えば？」
「え？」
「だから、例えばどんなのがいいの？」
そんなこと言われても。
えっと……、何も言わず優しく抱き締めてもらって、優しくキスをして……？
「ごめん、無理。全然イメージ湧かない。霊夢は普段の通りでいいです。あ、でも食器は片付けよう。流しに。うん、それくらいしよう」
「……ま、それくらいはね」
なんだその間は。
言わなきゃまた押し倒してただろ。
でもいざ片付けて布団まで来ると、困る。
押し倒してくれれば、切り出したりしないで済むし、変な間とか作らないで済むし。
あ、私、凄い我侭だ。
「ん……、魔理沙ぁ……」
でも霊夢は私を求めてくれる。

優しくなんかじゃなく、強く。
キスをして、舌を絡めて、熱をくれる。
「れい、む。あ……っ」
反射的に出した手が絡め取られる。
霊夢に愛されて、私は恋に火を灯す。
果てて眠るまで、私は夢を見られる。
ずっとずっと一緒にいる夢を。